

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 安野 智子

本論文は、世論形成過程に関する社会心理学の視点からの理論分析・実証分析である。

まず第1章において、過去の世論概念の問題点が指摘され、公共性のみならず、世論の分布の認識・世論の分立を考慮した理論的検討を行なわれる。次いで、世論の分布を認識する媒体であるマスメディアのリアリティ形成に関する研究が体系的に網羅され、その中でマスメディアの影響過程の差異・分化が検討される(第2章)。

第3章は「意見分布とその認知」であるが、ここでは一転、対人的なソーシャル・ネットワークのもたらす情報環境的視点から、理論と実証分析が証拠として提示される。そしてここで見いだされた等質なソーシャル・ネットワークの由来を求めて、コンピュータ・シミュレーションによる分析が提示され、その上で、このシミュレーション・モデルの中でマスメディアの及ぼす効果が検討される(第4章)。さらに、その成果の実証的根拠として、世論調査としては極めて貴重なスノーボールサンプル・データの分析が行われ、根拠が確認される。

第5章は「沈黙の螺旋理論の再検討」と題され、世論過程全体に渡る理論的・実証的分析となり、第6章は「重層的な世論過程：世論変化の許容範囲モデル」である。これら2つの章で、分立した世論のダイナミックな動態を捉え、いかにして世論が変化や合意形成を達成するのかが、理論的・実証的に分析される。実験的手法も応用した多角的な分析である。

結果として本論文は、これまでの世論理論の欠陥をつき、かつ適切な世論調査・実験・シミュレーションによって理論を実証している。また、世論の公共性への目配りをしつつ、世論の重層過程に関わる、ハードコア層の議論、許容範囲の可能な世論とそうでない世論の議論、世論の多様性と多重過程に関わる議論をなしえている点で、オリジナリティが高い。

仮に問題ありとすれば、世論の具体的な分析対象とされた社会的争点の類型が必ずしも整備されていない点であろうが、これは世論の実証研究が共通してもつ限界でもある。こうした問題点にも拘わらず、本研究は体系的な世論研究たりえており、その精緻な実証性の点で高く評価されよう。これによって著者が研究者として十分な能力を有することが示されているので、本論文は博士(社会心理学)の学位を授与するに値するものと判断する。